

## 書評 03

加藤 就一 著

# 『ごめんなさい、ずっと嘘をついてきました。—福島第一原発ほか原発一同』

書肆侃侃房 / 2021 年 3 月刊 / 304 ページ / 1600 円 + 税  
ISBN 978-4-8638-5451-2

評者：青木 美紗  
奈良女子大学 講師



気候変動問題が顕著になる中、エネルギー政策の転換が世界的にも求められている。二酸化炭素を排出しないエネルギーを考えると、しばしば候補に挙がってくるものが原子力発電ではないだろうか。しかし、2011年3月11日に福島第一原子力発電所の事故を経験した日本において、原子力発電を発電時の二酸化炭素の排出量が少ないことを口実に、継続あるいは新設することには国民が真剣に考えなければならない。多くの国では福島第一原子力発電所の事故をきっかけに、脱原発に動き始めている。日本は推進に向けて舵を切ろうとしているが、今一度立ち止まって、原子力発電が、本当に二酸化炭素の排出量が少ないのか？本当に環境にやさしいのか？本当に低コストな発電方法なのか？など、本当はどのようなものなのかを学ぶ必要がある。その際に参考になる書籍の一つとして本書を紹介する。

本書は、福島第一原子力発電所が主人公となって、これまでメディア等で報じられることがほとんどなかった原子力発電に関する真実を、「今まで嘘をついていてごめんなさい」と主人公が詳細を語りながら懺悔するという内容になっており、筆者である日本テレビのドキュメントディレクターである加藤就一氏の取材内容に基づいて書かれている。一般市民からすると、原子力発電の技術は難しくてなかなか難解なイメージだが、本書は技術面も含めて丁寧に説明してくれているため、原子力発電の基礎知

識がなくても読み進めることができる。

主人公である福島第一原子力発電所は、本書において15項目について「ごめんなさい」と謝罪し、最後には遺書も残している。15項目のタイトルは、「私は空へ海へ、長年放射能を捨て続けてきました」「私が事故ると被害額が国家予算を超える!?!」「またまた外務省が隠した報告書は、原発へのミサイル攻撃の損害資産」「私が出す何十種類もの放射能。人体への影響が未だわからない」「子どもたちへ、将来を心配させてしまっでごめんなさい」「西日本や韓国の原発が事故ると大変よ」「米国ではダメダメな避難計画だと原発は働けない。けど日本は…?」「放射能は、まやかしだらけでごめんなさい」「それは私たちが出す核のゴミのこと」「実は、原発の過酷事故は何度も起きてた」「先進国日本だけ、ガン死が増え続けています」となっている。いずれの項目も、現場の声に基づいて、これまでほとんど報道されていなかった内容も書かれている。また、日本のことだけでなく、他国との比較も随所に見られ、日本の立場を客観的に見るという意味でも参考になることが多いだろう。原子力発電所の構造から放射性物質と健康に至るまで多岐にわたる内容となっているため、紙幅の都合上すべてを紹介することはできないが、いくつか紹介させていただきたい。

まず原子力発電の「安全神話」がどのように作られたかが二つ目のごめんなさいに記載されている。福島第一原子力発電所の事故では、住

民への補償や除染などで20兆円以上が必要となったが、これは日本に最初の原子力発電が建設される前から国は認識していたようだ。1959年に最初の原子力発電所を建設する際に、唯一の被爆国である日本において原子力発電を国民に受け入れてもらうために、被害総額を科学技術庁は試算しており、『大型原子炉の事故の理論的可能性及び公衆損害額に関する試算』という報告書を作成していた。この試算における損害額は当時の日本の国家予算を軽く超えていたようだ。万が一事故が発生すれば、その損害賠償は国と電力会社が負担することとされ、国ということは結果的に国民が支払うということであるが、この報告書内容は国民に知られることはなかった。報告書には、事故による健康被害、除染費用、死者数などに加えて内部被ばくの被害についても書かれている。しかしこの報告書を国会に出せば原発計画が白紙に戻ってしまうことから、1999年まで「隠ぺい」され、国策という力で原発を設置していくことになる。そして原発がとんでもない代物だということを国民に知られないようにするために「絶対事故は起こらない！絶対安全」という「安全神話」を作り上げ、「安全」といいつつも原発は人里離れた場所に立てなければならないということが設置条件になった。

次に、近年日本において議論となっているトリチウムを含んだ「処理水」の海洋放出について七つ目のごめんなさいから紹介する。筆者が電力10社に対して実施した共通アンケートで、放射性物質を空中にも海中にも「出す」とすべての電力会社が回答したことに加えて、トリチウムに関しても全社が「トリチウムは今までも世界中の原発が長年薄めて捨ててきたから問題ない」として放出していることが判明したという。ではトリチウムは人体に影響はないのだろうか。実はアメリカの飲料水のトリチウム基準値は日本の13倍も高くなっているようだ。1974年に開催された日本放射線影響学会で「ト

リチウムは極めて低い濃度でも染色体に異常を起こす」と日本人が発表していることに加えて、アメリカではトリチウムは人体に危険という認識があるため基準を厳しくしている。さらに「処理水」にはトリチウムだけではなく、半減期1570万年のヨウ素129やルテニウム106、テクネチウム99などが残っていることが判明しているという。筆者は海洋放出以外にも、トリチウムを低コストで除去できる技術も開発されつつあるし、20年経つとトリチウムの濃度は1000分の1になるので、石油の備蓄タンクが12個あれば保管できると指摘しており<sup>1</sup>、海洋放出以外の方法も検討する必要があると提言している。

それ以外にも、日本の原子力発電の安全基準が他国に比べて不徹底であること、「原子炉立地審査指針」から福島第一原子力発電所の事故以降「地震」「津波」「洪水」「台風」「活断層」の文字が消去されて改訂されていること、東日本大震災の際に「トモダチ作戦」で支援してくれた米兵が被害に遭っていたこと、テロで原子力発電所が狙われたらどうなるかなど、多角的な観点で原子力発電所を捉えている。長年、原子力発電所のメンテナンスに携わった平井憲夫さんの言葉、「原発を一日止めると何億円もの損になるからですね。だから電力会社はできるだけ止めないのです。放射能というのは非常に危険なものです、企業というのは、人の命よりもお金なのです」「原発がある限り、世界に本当の平和は来ないのです」は忘れてはならず、将来世代に何を残すべきか、原子力発電の問題から、エネルギー、核兵器問題、平和、科学の在り方について多くの人が一緒に考えるうえで、参考になる一冊であるだろう。

#### 注

- 1 「原発が嘘を告白し懺悔 ノンフィクション小説の著者に聞く」(2021年5月31日) <https://www.nikkan-gendai.com/articles/view/life/289740>.